月刊
オリーブ
2025
12
Vol.127
— 真の更生を目指して —

愛

『父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』

（マタイ　19：19）

イエスが語られたこの言葉には、信仰生活の土台となる2つの愛――家族を敬う愛と、身近な人を大切にする愛――が示されています。どちらも日々の生活の中で当たり前に思える一方、実際には最も試される領域です。行き違いや弱さを覚えることは誰にでもありますが、神の愛はその都度、私たちを支えてくださいます。その確かさは、これまでの歩みの中で幾度となく示されてきました。

特に、死に近い体験をしたときに、私が味わった神の守りと平安は、今も深く心に残っています。有限の命を意識することで、日々の恵みや人とのつながりの尊さを、以前よりも強く感じるようになりました。

一方で現代社会では、人と人とのつながりが弱まり、互いの痛みを受け止めにくい時代になっています。地域社会の結びつきが薄れ、ともすると人は容易に孤独と不安に陥ります。だからこそ、神の愛に立ち返り、与えられた愛を分かち合うことが求められています。小さな思いやりの積み重ねこそ、社会に温かさを取り戻す一歩になると信じています。

この一年を振り返ると、心に深く刻まれた一場面があります。自分の力ではどうにもならず、助けにゆだねるしかない――「弱さの中に働かれる神」の現実を身をもって教えられました。

それは9月、富士へ向かったときのことです。「生かされた証として一度は向き合いたい」という思いから挑戦しましたが、8合目で力尽き、下山も自力では叶いませんでした。備えの足りなさを痛感しつつも、あの場面で示された神の支えは、この一年の歩みを振り返る上で大きな意味を持っています。

富士は〝強さ〟の象徴ですが、そこで示されたのは私自身の弱さと、弱さに寄り添ってくださる神の支えでした。その経験が、行き場のない思いを抱える方々への祈りと願いへとつながっています。

この挑戦には、どうしても届けたい願いがありました。無期懲役の方々を取り巻く厳しい現実を知り、心を痛めてきたからです。2024年、全国に約1600人いる無期懲役受刑者のうち、仮釈放が認められたのは1名という報道がありました。社会の視線が冷たく映ることもあり、多くの方々が深い孤独と不安を抱えながら日々を過ごしています。

どれほど多くの人が、先の見えない思いを胸に歩んでいることでしょう。

だからこそ私は、「あなたは見捨てられていない」という希望をどうしても届けたいと願ったのです。

2025年を締めくくる今、あらためて「愛」という言葉を心に留めたいと思います。神が与えてくださった愛を、自分自身に、家族に、そして隣人に向けて歩む一年となりますように。

2026年もどうぞよろしくお願いいたします。

オリーブの家
理事長
青木康正

支援者からの寄稿

「希望を灯す」

熊本学園大学　商学部教授
萩原　修子

みなさん、こんにちは。私は熊本市内の大学に勤務し、２０１６年、熊本地震後の11月から、オリーブの家に、ほぼ月に1回訪問させていただいております。知人から「受刑中にクリスチャンになって、今は元受刑者を支援している人がいる」と紹介を受けたのがきっかけでした。私はもともと宗教、信仰がもつ力について関心をもっていたため、ぜひお話を伺いたいと思い、訪問させていただきました。ちょうどその頃は、震災後に新しく、今の食堂ができたばかりのときで、オリーブの家が立ち上がって、３年目の時期でした。地震後のファミリーとの避難や大変な困難も、その中に「神の恵み」を見出して語る青木さん、順子さんの晴れやかな笑顔を今も思い出します。

あれから、もう9年経ったのだなあと感慨深く思います。本誌にはずいぶん以前に、一度寄稿させていただきましたが、今回は、12年目を迎えられたオリーブの家の事業継続力について、感じたことを書かせていただきます。

10年を迎えたときに青木さんご自身も巻頭言で触れておられましたが、企業においても、10年続くのは本当に大変難しいことだと言われています。一方で、日本は海外に比較すると、老舗企業が多いのも特徴的で、創業２００年を超える老舗企業の数は世界の半分以上を占めているそうです。ここで興味深いことは、その老舗企業の7割が家訓をもっており、「利に走るな、贅沢をするな、投機はするな、地域に貢献せよ」といった形で、利益優先よりも、会社の存在の独自性やこだわりを追求している会社が多いということです。

オリーブの家はＮＰＯ法人であり、企業ではありませんが、事業継続には家訓と独自の存在価値が関連している点は、注目すべきです。何のために事業を行うのか、どのような方針で、どう決断するか、どのように課題を乗り越えていくのか。これら老舗企業の運営上の家訓にあたるものが、オリーブの家における確固とした信仰であり、信仰に根ざした覚悟を持った刑余者支援という独自の存在価値があると考えられます。

たとえば、折々の訪問時に、青木さん、順子さんが「現在、このような問題を抱えている」とお話しされますが、次に訪問したときには、お二人にとっては「思いよらない形で」、あるいは、「祈り」の結果の決断といった形で、問題が解決されている。常にそこには「神の御手」があり、「必要な時に与えられ、与えられないのは時が満ちていないから、今は待つ」。問題や試練への乗り越え方に、このような信仰による確固とした歩みが見出せます。冒頭の、熊本地震後という試練に「神の恵み」を見出していたのも、まさにその例です。オリーブの家が継続してきたのは、この事業の深い使命感と覚悟、環境変化における試練の捉え方であり、それら全ての土台となる信仰の力によって、他と異なる独自の価値を、今の社会の薄暗い闇に放ちつづけている。そのような印象をもっております。

さて、今、また、オリーブの家は新たな段階に入っているように思います。青木さんは常に何か新しいチャレンジをされてきたと理解していますが、今年の富士登山への決意は特別だと感じておりました。多忙な業務の中で、青木さん、順子さんの登山

への準備は余念なく、そのご様子がいかに生き生きとしていたことか。一方で、未知への挑戦にかける思いの深さと緊張感はひしひしと伝わってまいりました。本誌10月号の巻頭言で、ご自身が詳細に語っておられたように、富士登山での壮絶な体験は青木さんに決定的な影響を与えられたのだと伺いました。多くの人のサポートを得て下山し、そこから得られたこと。そして、すぐ来年の登頂に向けて準備を始める覚悟の先にあるもの、それは何だろう。先の見えない無期刑の方の思いを背負い、その先を自ら切り開くような挑戦に駆り立てているのもまた、信仰の力なのだろうと思います。

聖書では、まったく未知の世界にただ神への信仰にのみ従って赴く人たちが、まさに次の時代を切り開いてきたことが記されています。今見える風景に安住せず、未踏野を切り開きつつ、新しい風景を見るために挑戦しつづける青木さんと青木さんをサポートする方々の姿。それは、無期刑の方をはじめ刑余者の方々の前に、諦観で生きるしかない風景のその先に、まだ見たこともない風景を描き出そうとしているのかもしれません。

私たちも、社会の薄暗さに疲弊し、目の前の荒天に力を失うことが多々あります。その向こうに、青木さんたちが富士登山の途上で見た、息をのむような絶景があること。それを自ら生き生きと描き続けることが、77歳の青木さんの挑戦であり、オリーブの家が社会で灯しつづける希望のように思えます。

萩原　修子

はぎわら・しゅうこ

1967年福岡生まれ
熊本学園大学・商学部教授
1998年に熊本学園大学着任。
専門は宗教学・文化人類学。
近年は水俣の支援や宗教と福祉に関心をもっている。

受刑者のみなさんへ

オリーブの家はあなたの自立をせいいっぱい応援します!

住む場所(すばしょ)、食事(しょくじ)、仕事(しごと)を準備(じゅんび)します

お花見でニコニコ(^^)

理事長の青木です！

みんなで卓球大会！

「あなたには帰る場所がある」

九州の熊本で
あなたを
まっています！

自立準備ホーム・オリーブの家
まずはお手紙ください
〒860-0082
熊本県熊本市西区池田２丁目９番1号コーポ池田201

オリーブの家で見つけた笑顔

「一年をふりかえって ― 感謝の数々！」

今年もあとわずかとなりました。

オリーブの家でも、この一年の変化といえば人々の出入りが思い出されます。６月下旬、病院から帰ってきたＯさん。車いす生活となりましたが、沢山の支援を受けてオリーブの家で暮らしています。同じ６月には千葉県から理事長を頼って青年がやって来ました。何年も前になりますが、理事長と手紙のやり取りをしていた方です。彼は、こちらのグループホームに身を落ち着けました。また、長く入居されていたファミリーの１人を、新しいグループホームへ送り出しました。

このような施設の動きの中、富士山に登るという計画がスタートしました。５月から、理事長と私は、富士登山に向けて週末には訓練を開始。ずぶの素人の２人です。心の隅には緊張感がずーっと居座っていました。当初の計画の７月は、台風の為中止！９月に再チャレンジとなりました。

６名のチームで決行されました。結果は、皆さんご存じの巻頭言の報告の通りです。

「私たちの頭に思い浮かびもしなかったもの」それをチャレンジさせて頂いた貴重な経験でした。

副理事長　小原順子

全国のオリーブの家をご支援くださる皆様へ

今、全国の自立準備ホームの存続が危ぶまれる事態が発生しています。国が前年に比べ予算を減額、施設への委託日数を減らす方針でいるのです。そもそも国からの委託費では事業が成り立たない上でのことです。更生保護行政の適正な執行を願うとともに私たちも使命達成のために知恵が必要です。オリーブの家が希望と勇気を届け続けることができるようご支援とご加祷をお願い申し上げます。

監事　辻村真和

会計報告

		8月	9月	10月
月次自立準備支援人数		6名／8室	6名／8室	5名／7室
グループホーム利用者数		12名／12室	12名／12室	12名／13室
累計ファミリー数		178名	179名	179名
収入	自立準備ホーム	814,910	914,534	1,082,553
	献金	795,300	850,300	698,200
	グループホーム	2,375,006	1,669,327	2,039,601
	その他	303,449	213,405	209,408
収入合計		4,288,665	3,647,566	4,029,762
支出	家賃	677,800	710,800	677,800
	水道光熱費	285,111	292,263	275,128
	食費	549,477	487,563	515,389
	人件費	1,973,690	1,909,911	1,944,304
	活動費	72,415	232,001	181,207
	その他経費	474,796	538,659	481,574
支出合計		4,033,289	4,171,197	4,075,402
収支合計		255,376	-523,631	-45,640

前月繰越現金預金残高	5,087,110	5,562,379	5,108,960
翌月繰越現金預金残高	5,562,379	5,108,960	5,401,062
施設準備積立金残高	1,650,263	1,701,692	1,751,692

※　活動費には、聖書フォーラム大阪リアル聖会への参加交通費など75,760円が含まれています。
※　その他経費には、福利厚生費として社員との食事会31,730円、タイヤ交換費用56,880円が含まれています。

銀行振込

肥後銀行（銀行コード：**0182**）
京町支店（支店コード：**156**）
口座番号：（普通）**1574408**
口座名義：NPO法人オリーブの家
トクヒ）オリーブノイエ

郵便振替

銀行名：ゆうちょ銀行（金融機関コード：**990**）
口座番号：**17180-5444801**
口座名称（漢字）：NPO法人オリーブの家
口座名称（カナ）：トクヒ）オリーブノイエ
（他銀行からお振込の場合は）
店名：七一八（読み：ナナイチハチ）
店番：**718**
口座番号：（普通）**0544480**

月刊オリーブ
2025年12月１日発行
(毎月1回発行)　第127号

編集・発行　ＮＰＯ法人「オリーブの家」
〒860-0082　熊本県熊本市西区池田２丁目９番１号コーポ池田201
TEL 096-342-4123　FAX 096-342-4248　E-mail 0110harvest@gmail.com
https://npo-olive.org/